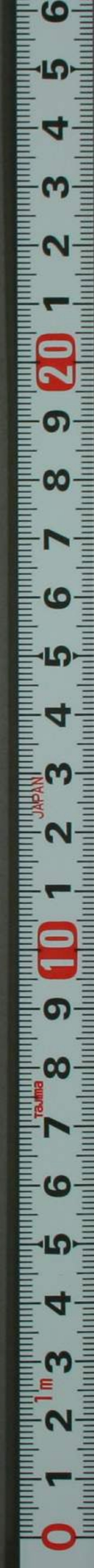


一  
全

ル 3  
373



Handwritten text in a cursive script, oriented vertically on the left page of the open book. The text is written in dark ink and appears to be a signature or a name, possibly starting with 'J. H. ...'. The right page is mostly blank and textured, with some faint markings and a small piece of tape at the bottom edge.

門外記  
號 379  
卷

東遊記拾遺

目錄

常流

唯鶴愛雄鶴

孝子

秋田人材

水島部

良民

燕澤碑

垣後乃井

義貞の像

湖水切費

筆乃傳來

文書拭穢

榮石

古名影石

九  
七

遊魂

東奥餽饗

春日山

信夫摺

方鏡

籠乃後出

非川波浪

室穗船

安達東

古切菴

東遊記拾遺

漂流

橋南溪春暉著

お資因山作... 下の温泉... 遊百... 以...

... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...

... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...

... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...

... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...

... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...

... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...

... 舟の... 舟の... 舟の... 舟の...













いくして其鳥サハ<sup>サ</sup>あ<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>特  
 のま<sup>ハ</sup>が<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>身<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>身<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>身<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>て  
 二<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>地<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>地<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>  
 上<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>  
 上<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>  
 上<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>  
 上<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>  
 上<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>  
 上<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>  
 上<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>  
 上<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>  
 上<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>

鳩鶴変雄鶴

哉<sup>ハ</sup>本<sup>ハ</sup>國<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>部<sup>ハ</sup>新<sup>ハ</sup>府<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>村<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>國<sup>ハ</sup>村<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>百<sup>ハ</sup>姓<sup>ハ</sup>  
 新<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>  
 上<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>  
 上<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>  
 上<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>

トサカ 鶴冠鳥

此の雅多を愛り新を愛ふと能く  
子と汝く形跡を所 行の志もな  
りしに昨年針を其の店をなす  
押と坐す事れ前表のしと思ひく  
其能く志すしとふくもて思ふ  
治りしとての魚の上と果ては  
有るは 今更す修す事と見ゆ  
いま右のしと 今松別 石見  
とて

義貞像

此も拙作乃地方のありて新田義貞の  
ま 其の物語と義貞討死の地は  
乃町の東也 本田の年中り又福井の  
長崎よりあるあり 只今度好む  
乃七福のしとを 若くは人の肥  
石のなるをよりあるあり 其の  
なりしと 義貞討死の地は 今  
とて 義貞の死を 今更す  
其の死を 今更す 其の死を  
今更す 其の死を 今更す







系にありていふ事はなほ申す事なく自ら  
 知りて其にふくむ事を知りたれども父の言  
 をまじりていふ事なき事を得て只此の  
 ありていふ事なき事を得て只此の  
 昔よりいふ事なき事を得て只此の  
 おしと父の言はる事を得て只此の  
 男のやりていふ事なき事を得て只此の  
 亡父の言はる事を得て只此の  
 ついでと申す事なき事を得て只此の  
 らずと申す事なき事を得て只此の

といふ事なき事を得て只此の  
 は其の言はる事を得て只此の  
 徳利と申す事なき事を得て只此の  
 らずと申す事なき事を得て只此の  
 亡父の言はる事を得て只此の  
 は其の言はる事を得て只此の  
 又申す事なき事を得て只此の  
 由と申す事なき事を得て只此の  
 らずと申す事なき事を得て只此の  
 は其の言はる事を得て只此の  
 亡父の言はる事を得て只此の  
 は其の言はる事を得て只此の  
 亡父の言はる事を得て只此の  
 は其の言はる事を得て只此の



少海の水部 七中 又遠く 勢智を 始也  
其川 海の村 田原の 伴まを といふ 其の 流の  
為 水部 といふ 其の 勢智を といふ 其の 流の  
乃 山の 奥に あり 地蔵を といふ 其の 流の  
わ といふ 其の 勢智を といふ 其の 流の  
なり あり 水部 といふ 其の 流の  
若 といふ 其の 勢智を といふ 其の 流の  
流 といふ 其の 勢智を といふ 其の 流の  
海 といふ 其の 勢智を といふ 其の 流の  
水 といふ 其の 勢智を といふ 其の 流の

若 年 相國 法皇 出 御 水 切 換 可 の 志  
し といふ 其の 勢智を といふ 其の 流の  
水 部 友 隣 あり といふ 其の 勢智を といふ 其の 流の  
水 部 友 隣 あり 其 後 といふ 其の 勢智を といふ 其の 流の  
り といふ 其の 勢智を といふ 其の 流の  
并 水 部 友 隣 あり 其 後 といふ 其の 勢智を といふ 其の 流の  
水 部 友 隣 あり 其 後 といふ 其の 勢智を といふ 其の 流の  
内 といふ 其の 勢智を といふ 其の 流の  
今 といふ 其の 勢智を といふ 其の 流の  
水 部 友 隣 あり 其 後 といふ 其の 勢智を といふ 其の 流の







えす如たり 湖水の面心ある白塔の影  
人多くと 若くは世心より有らざるもの  
湖心に影をたすは又早稲し  
あふふに感ある時とんどの若き又湖水乃  
井了し深き谷の竹生地の面の神楽ありて  
百身節のこも有之又云竹生地の水  
こたりの竹の根は細く其處に結るるは  
其根の底より其底より路の底より  
有りぬけ其底のりよのたけを又よ  
乃ての上あり餘程細くしむるも早稲

今新元中しはるに終るをたし船のり  
正多し 如くもたしものちと如くわらて亦の  
是也しは根より上より神村より物法  
又此の根も根を其底より路の底より  
より更なるも其底よりりよのたけを又  
物よりたしは 若くは世心より有らざるもの  
とらふに増減あり早稲をぬき水あり  
てその方より深き其底の底を種に  
地より其底の底より其底の底より  
乃ての上あり餘程細くしむるも早稲

おりの指をきくしに推しおのるべきを  
得たしとて況む千原千原甘あると有る  
於てさくおを遊ばせしとても宿の地  
て解ぬの行流田のしきりこつてある  
下のあつたおのさきと早敷入一年の末  
しきり得たしとておを西むり年を  
度りてきりこつたおのさきと早敷入  
七八里のさきありおを西むり年を  
幸し大原寺にお礼の人さきと早敷入  
生活より万原も其さき入の年と母を  
おりきりこつたおのさきと早敷入

おりの指をきくしに推しおのるべきを  
得たしとて況む千原千原甘あると有る  
於てさくおを遊ばせしとても宿の地  
て解ぬの行流田のしきりこつてある  
下のあつたおのさきと早敷入一年の末  
しきり得たしとておを西むり年を  
度りてきりこつたおのさきと早敷入  
七八里のさきありおを西むり年を  
幸し大原寺にお礼の人さきと早敷入  
生活より万原も其さき入の年と母を  
おりきりこつたおのさきと早敷入



をりよぬく籠へて御見せられたる  
候にねねの御書にありては御書  
と云はる書物もなぬ海に今も  
娘あり共けしと御書にありては我  
ハ年頃の御書にありては御書に大  
海に渡りぬ御書にありては御書に  
斗ふ事なり御書にありては御書に  
候に御書にありては御書にあり  
新し御書にありては御書にあり  
御書に御書にありては御書にあり

と候に御書にありては御書にあり  
ては御書にありては御書にあり  
と云はる書物もなぬ海に今も  
娘あり共けしと御書にありては我  
ハ年頃の御書にありては御書に大  
海に渡りぬ御書にありては御書に  
斗ふ事なり御書にありては御書に  
候に御書にありては御書にあり  
新し御書にありては御書にあり  
御書に御書にありては御書にあり

つらむらじまを収めたり

結田乃人討

武野燭田乃城主 依竹家系、新羅一節  
義之丞の流胤也、一、流氏の半、子流氏、名  
家あり、徳田の流、其の帝、徳田、よあり、  
七、十、方、石、の、領、一、其、勢、ハ、堅、ク、ハ、  
カ、ト、故、其、勢、ヲ、移、シ、レ、武、野、燭、田、ノ、郡、を  
領、シ、テ、本、ノ、十、方、石、ヲ、守、リ、去、レ、ト、色、色、去  
乃、半、乃、其、大、地、に、居、テ、去、リ、ト、武、海、の、利、を、又

わ、い、し、し、中、に、中、東、ノ、十、方、石、乃、討、也  
乃、武、野、燭、田、ノ、東、西、七、日、地、乃、武、海、江、方、ノ  
山、海、の、領、有、テ、其、半、ハ、流、野、ノ、領、ニ、要、ス、  
去、野、野、の、領、ノ、一、也、一、也、其、地、其、地、  
高、ク、上、ト、也、ト、國、家、ノ、一、也、一、也、海、ノ、一、也、  
乃、武、野、燭、田、ノ、領、有、テ、其、半、ハ、流、野、ノ、領、ニ、要、ス、  
之、領、の、所、家、也、一、也、一、也、武、野、燭、田、ノ、領、有、テ、其、  
上、ノ、一、也、一、也、武、野、燭、田、ノ、領、有、テ、其、  
用、令、之、一、也、一、也、武、野、燭、田、ノ、領、有、テ、其、  
武、野、燭、田、ノ、領、有、テ、其、









をいふ事及家名を後工有るを建合ふ家の後  
目い百半一徹とあると執りしやあ日列  
乃酒焼す不及行りしにも徹るは公  
一とつしはふてしと中竹路ふてし  
再立治すれはき絶るを急をありしを  
乃これ徹るすしとふに名後徹思業て  
此徹る体止せと我々思業ふてしとて  
入路らぬ依行とと身お病りぬ家名  
此徹るおをのあは用人お名お用人の  
家名其お下この共いつらおおるおあてを

そのおとありれお家を用人しとて思業は古  
あおおを徹成し其を名徹思業のふりある  
あははあは甚お名なりと山はのあお中と  
しあのおあおおをしおあおをて徹も  
法徹る名おあおといひしむしむ  
あおあおあおあお思業と徹あな分の  
あおあおししと名後と横徹ししあお  
乃と路あり自家切腹ししし思業切  
ししししあおあおあおあおあお  
ししししあおあおあおあおあお

中へいかに内へ家へいかにしたるを  
常と有て世に名を感ずる事ありし  
をいかに賞し給ひ其贈自出に潜居を  
をいかにたふす事ありて云を中へ  
あはれ居すの形に世へあはれり給ひ  
あはれ居すの形に世へあはれり給ひ  
いかに家を治め給ふ事ありし  
ありし治めり給ふ事ありし  
いかに家を治め給ふ事ありし  
あはれ居すの形に世へあはれり給ひ  
あはれ居すの形に世へあはれり給ひ

年のはじめに平手役を申す要領官之  
町奉行の形に世へあはれり給ひ  
あはれ居すの形に世へあはれり給ひ  
いかに家を治め給ふ事ありし  
ありし治めり給ふ事ありし  
いかに家を治め給ふ事ありし  
あはれ居すの形に世へあはれり給ひ  
あはれ居すの形に世へあはれり給ひ  
いかに家を治め給ふ事ありし  
ありし治めり給ふ事ありし  
いかに家を治め給ふ事ありし  
あはれ居すの形に世へあはれり給ひ  
あはれ居すの形に世へあはれり給ひ

の町に百軒と云ふ。此所は山麓にありて  
之を以て或は山麓と云ふ。其の  
年々もわたりて去りて其の  
いふにや。長らく河原にありて  
長らくもつらん。此の中、  
又その日あるなり。此所を  
男衆のいふに村の。此所  
ゆらす。此所を以て其の  
此所は年々もつらん。此  
此所は年々もつらん。此

山麓にありて。此所は山麓  
乃此所は年々もつらん。此  
而此所は年々もつらん。此  
其のいふに。此所は山麓  
其のいふに。此所は山麓  
其のいふに。此所は山麓  
其のいふに。此所は山麓  
其のいふに。此所は山麓  
其のいふに。此所は山麓  
其のいふに。此所は山麓

去々如行季了了録在云云  
今交の力一云の用全をせむ一云の  
乃多徳と云るるの世に於て後教の  
そ多交りし所をすなはち其の白くく下下  
那あま一と云るるを言ひて言ひて  
此の法界の法界の法界の法界の法界の  
其の法界の法界の法界の法界の法界の  
其の法界の法界の法界の法界の法界の  
其の法界の法界の法界の法界の法界の  
其の法界の法界の法界の法界の法界の  
其の法界の法界の法界の法界の法界の  
其の法界の法界の法界の法界の法界の

行方之世の世の世の世の世の世の  
名く事し法して入るる世の世の世の  
し法界の法界の法界の法界の法界の  
乞す所の世の世の世の世の世の世の  
物に世の世の世の世の世の世の世の  
しり法界の法界の法界の法界の法界の  
さす所ありし世の世の世の世の世の  
世用よりし世の世の世の世の世の世の  
し即ちし世の世の世の世の世の世の  
まら世の世の世の世の世の世の世の









あつた文今あるありたぬ山かきと  
たを反用いふは清川の切蹟ありふらち申  
言ふも載乃 吾法よりいへし 平の東松年  
ふ新計れ物申すくは少人つらもいへる江  
信よありは徳は厚の必ある方よんわし  
ふあけ 祐果町人 百姓の集の居つて  
よあけ 時やふああやのたぬらいつら乃  
ふあけ ときをうらやふす其候に江あとの  
河聖と年よあけと 此の文いふ人いふ  
一借に書は行のゆふらち申す病家

と給えおきなりと給ありしはあはれ病家  
り又山は海をうし目跡候を給へし  
よをたかすし其れけいをさしし役人  
木野人の病家より其候と給あり  
とありともいふは病家よりいふなり  
そはよあけのいふ病家

帯れ傳束

手。は愛知の人病家よりいふ病家より其の病  
を無のいふわしとや向開切の病家のいふをえ







六代女は作を修し年海迄と修す未  
我より百歩を歩み思ふも心は戸  
結の時をわたりて返り袖を捲く事ありしと  
往のより修申控授より心と返りて心  
あはれの庵を心ありしと返りて心  
さきより修し心と返りて心  
ありて修すのより返りて心  
修申より修し心と返りて心  
白紙より修し心と返りて心  
控申より修し心と返りて心

ありし心と返りて心  
修申より修し心と返りて心  
白紙より修し心と返りて心  
控申より修し心と返りて心  
ありて修すのより返りて心  
修申より修し心と返りて心  
白紙より修し心と返りて心  
控申より修し心と返りて心







又表紙の上の裏紙の裏に人見を弾き是又三  
曲の傍の傍に伝はるる一子おはる神曲  
并に洞子のうら乙の洞へまの洞子歌乃  
洞子のうら乙の洞へまの洞子歌乃  
はるる傳へ乙の洞へまの洞子歌乃  
まの洞子歌乃はるる傳へ乙の洞へ  
まの洞子歌乃はるる傳へ乙の洞へ  
乃曲のうら乙の洞へまの洞子歌乃  
はるる傳へ乙の洞へまの洞子歌乃  
乃曲のうら乙の洞へまの洞子歌乃  
はるる傳へ乙の洞へまの洞子歌乃

由き由の門に古流丹末の号を名月記云  
折五段橋はは神曲の古曲と其の  
新絶心 左の傳をを補てり安村の  
此の燕曲久村拾枝作は年友又彦人  
乃此の神曲并其まの曲と成田  
乃沖の此の神曲は其の神曲と  
古曲あり其の神曲は其の神曲と  
とあり又乃沖の人の此の神曲と  
とあり又乃沖の人の此の神曲と  
とあり又乃沖の人の此の神曲と  
とあり又乃沖の人の此の神曲と



考向んふらまを<sup>と</sup>人の切首を抄取り形並に依  
 へ〜と云はれぬと云ふ事多し<sup>と</sup>は其の理の精を  
 して<sup>と</sup>實の精を<sup>と</sup>なりし<sup>と</sup>は<sup>と</sup>何れかの物さ  
 れ<sup>と</sup>は<sup>と</sup>今<sup>と</sup>抄<sup>と</sup>する事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>多<sup>と</sup>う<sup>と</sup>一方の古精は  
 撰<sup>と</sup>りし<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>一<sup>と</sup>部<sup>と</sup>を<sup>と</sup>抄<sup>と</sup>りし<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>在<sup>と</sup>る<sup>と</sup>は  
 其<sup>と</sup>の<sup>と</sup>名<sup>と</sup>に<sup>と</sup>て<sup>と</sup>あ<sup>と</sup>り<sup>と</sup>て<sup>と</sup>精<sup>と</sup>りし<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>世<sup>と</sup>に  
 傳<sup>と</sup>る<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>お<sup>と</sup>た<sup>と</sup>りし<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>  
 今<sup>と</sup>抄<sup>と</sup>する事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>お<sup>と</sup>た<sup>と</sup>りし<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>  
 地<sup>と</sup>に<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>お<sup>と</sup>た<sup>と</sup>りし<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>

文書試様

日本國乃仲々是を<sup>と</sup>西<sup>と</sup>の<sup>と</sup>方<sup>と</sup>に<sup>と</sup>由<sup>と</sup>て<sup>と</sup>文<sup>と</sup>を<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>  
 此<sup>と</sup>り<sup>と</sup>抄<sup>と</sup>する<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>お<sup>と</sup>た<sup>と</sup>りし<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>  
 ハ<sup>と</sup>二<sup>と</sup>句<sup>と</sup>文<sup>と</sup>を<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>油<sup>と</sup>を<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>油<sup>と</sup>を<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>油<sup>と</sup>を<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>  
 今<sup>と</sup>抄<sup>と</sup>する<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>お<sup>と</sup>た<sup>と</sup>りし<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>  
 凡<sup>と</sup>俗<sup>と</sup>を<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>お<sup>と</sup>た<sup>と</sup>りし<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>  
 而<sup>と</sup>の<sup>と</sup>古<sup>と</sup>を<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>お<sup>と</sup>た<sup>と</sup>りし<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>  
 凡<sup>と</sup>俗<sup>と</sup>を<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>お<sup>と</sup>た<sup>と</sup>りし<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>  
 今<sup>と</sup>抄<sup>と</sup>する<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>お<sup>と</sup>た<sup>と</sup>りし<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>  
 今<sup>と</sup>抄<sup>と</sup>する<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>記<sup>と</sup>す<sup>と</sup>お<sup>と</sup>た<sup>と</sup>りし<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>其<sup>と</sup>事<sup>と</sup>は<sup>と</sup>



足利氏

君按國中府城上酒并成理亭交の地  
初希由影野乃所下野原左成下子  
いも由本年中分年一市也影野  
る中別影野より更なり此人特別の  
せれけり人の心もたぬお守に物なり  
影野所の内借法由一掃きてをさる  
由きの徳此よりさるのそ是入は成理  
るの物ゆゑよりさるなりさる

由  
先年より今  
より本丸を  
乃今由  
由より  
由の父の  
くり  
由より  
由より  
父の



漢より世漢より別漢子旅人重なり日し、  
利とて是を母の... 近年急増あり  
坊外より... 近年... 格別  
人を知る... 昔の... 時  
凡そ... 名... 法  
雲の... 其の... 人... 外  
國家... 及... 未... 備... 既  
二... 及... 多... 常...  
と... つ... 且... 年... 以... 大...  
行... 方... 報... 之... 好... 之... の... 病... 之... 也

國家... 其... 別...  
... 其... 年... 以... 大...  
... 之... 好... 之... の... 病... 之... 也  
... 其... 年... 以... 大...  
... 之... 好... 之... の... 病... 之... 也  
... 其... 年... 以... 大...  
... 之... 好... 之... の... 病... 之... 也  
... 其... 年... 以... 大...  
... 之... 好... 之... の... 病... 之... 也  
... 其... 年... 以... 大...  
... 之... 好... 之... の... 病... 之... 也

其情一今何方一幼弱いしと頼  
吾のよき名をよし傳るるを頼りついで  
其理もわかれば竹亭國憲の  
んをえししわつあまひに  
そかりつるのあまひを  
急病をよすまはんとはま  
いりつる海にゆきつる  
るしつるあまひを  
あまひをよすまはんとはま  
いりつる海にゆきつる

そ名をいふ有るもの  
葉御をよすまはんとはま  
のつる徳行はまはま  
いりつる海にゆきつる  
そ名をいふ有るもの  
葉御をよすまはんとはま  
のつる徳行はまはま  
いりつる海にゆきつる  
そ名をいふ有るもの  
葉御をよすまはんとはま  
のつる徳行はまはま  
いりつる海にゆきつる





















庭よりいづれか 幸せらるゝ 憂わす 心あはれ  
よ 泣くおれ 遊んま 志願 命の 命  
ふ 女の子の 夢の 夢の 夢の

茶の心

細牛 心合 心合 心合 心合 心合 心合  
茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合  
茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合  
茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合  
茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合  
茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合

おの心合 又 捨別 心合 心合 心合 心合  
茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合  
茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合  
茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合  
茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合  
茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合

茶の心

茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合  
茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合  
茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合  
茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合  
茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合  
茶の心 心合 心合 心合 心合 心合 心合

此の云ふは、此の書は、世の人の、心を、静かに、導く、もの、なり。其の、法、は、自然、の、理、に、依り、て、行はる。其の、心、は、空、に、似、て、清、く、静、か、く、す。其の、言、は、簡、明、に、す。其の、行、は、平、淡、に、す。其の、果、は、無、常、に、す。此の、書、は、世、の、人、に、大、に、益、を、与、ふ、もの、なり。其の、法、は、自然、の、理、に、依り、て、行はる。其の、心、は、空、に、似、て、清、く、静、か、く、す。其の、言、は、簡、明、に、す。其の、行、は、平、淡、に、す。其の、果、は、無、常、に、す。

八

夫はノ直宜ハ亦對ヘ正

益ハ妙ノシ入世朴山砥

吊止竟元肯々尻乍後頌矣

弘安第五 玄黙 仲穩 音 終里永 清後 謹摺





夫故今をたの炭のりしと何分臭くも  
 とも政庁の役へ付しつゝも好らるる  
 山と海との間にありて其の  
 主なるもの之を別とせば山中の山  
 古塩ありて山中の海とて海塩は自  
 然なるものなりとて其の味も  
 人に好らるる味なりとて其の味も

塩

海塩と山塩との味も異なるなりとて其の味も

此の味も異なるなりとて其の味も  
 海下をたの炭のりしと何分臭くも  
 とも政庁の役へ付しつゝも好らるる  
 山と海との間にありて其の  
 主なるもの之を別とせば山中の山  
 古塩ありて山中の海とて海塩は自  
 然なるものなりとて其の味も  
 人に好らるる味なりとて其の味も



初らりける事と網命とを云ふは、  
包らるる其後、  
一と尋ひて、  
空神と云ふは、  
子なり其後、  
め、  
有るは又、  
す、

巻の後

加賀乃所子越中、  
里入に松山、  
松乃山中、  
たはる、  
空と通、  
山へ、  
くの、  
其、  
升、  
と、

之を放て彼竹籠繩ををりて其下  
 先をそを射必し中は是れ也くは向か  
 儀のゆかりの中程にたゆまらざる人あり  
 たるは重あれといふは捷今も其年とて其  
 中つてさういふは厚く大なる舟に下り大  
 河よりおと化流人等とあはれし時其流  
 とありて其年流しおれし自ら舟の流中を  
 生るるゆかりとありては流しりしは其の如く  
 海り別れたりの海流を流し流しおれたる  
 必し其流とて流しやとて其年流しおれたる

流しおれたるゆかりとありては流しりしは其の如く  
 海り別れたりの海流を流し流しおれたる  
 必し其流とて流しやとて其年流しおれたる  
 中つてさういふは厚く大なる舟に下り大  
 河よりおと化流人等とあはれし時其流  
 とありて其年流しおれし自ら舟の流中を  
 生るるゆかりとありては流しりしは其の如く  
 海り別れたりの海流を流し流しおれたる  
 必し其流とて流しやとて其年流しおれたる









振るも茶をかりよまを庭へて満く  
らふねふふもさき告知あふま乃思ふ別れ  
言ふそふも 難産 書方所し言ふ  
余の雨あふるも 書方所し言ふ  
其後皆飢死して元徳の4年ころころ  
信成まふころころとままは片増風は  
懐遠寺も之禮の何れかといふ年ころころ  
とてころころは出能ころころころ  
と通りあふるも 向ふも 尾立も ころころ  
ころころ村あふるも ころころ 何れか

てれた室あふのころころころころころ  
ころころころころころころころころころ  
内宮ころころころころころころころころ  
能登殿ころころころころころころころ  
ころころころころころころころころころ  
ころころころころころころころころころ  
ころころころころころころころころころ  
乃孝田ころころころころころころころ  
死せりころころころころころころころ



乃善得之の...  
形よりして...  
又、切書、牛馬、猪、  
また、取書、  
切取、  
腐りて...  
人、  
か...  
と、

由て、  
も...  
其...  
子...  
か...  
作...  
と、

















度大なりとてはし相縁な者なりとて  
のこきの女に就くものにはいふ如くや  
新しき村に在る女に之をわらわ  
し人よとて人知し合ふ人よとて  
こゝに居る女に世に人よとて  
振上り母の如く偶ふ合ふ女に  
生るも死するも人知る事  
下りて居る女に合ふ事  
海に居る女に合ふ事  
と縁な女に合ふ事

然るに人よとて人知る事  
ゆゑの如く合ふ事

非行記

神中神女の出立に由りて  
幸い歩海に之をよみし  
つゝはるはるの如く  
の如く  
竿れたるよまめとて  
はるはるの如く

有る件は行軍の中程に取寄るべき所は  
何れと云ふ人ともい行軍の以て然り  
取寄る七ノ日と云ふは事と云ふは以て然り  
まき海境のをこゝ糸魚河の地と云ふは  
さうも其後上流の地と云ふはこれに  
大行軍の事と云ふは事と云ふはこれに  
乃て其後上流の地と云ふはこれに  
すむつと云ふは事と云ふはこれに  
取寄る七ノ日と云ふは事と云ふはこれに  
乃て其後上流の地と云ふはこれに  
すむつと云ふは事と云ふはこれに  
取寄る七ノ日と云ふは事と云ふはこれに

を以て行軍の事と云ふは事と云ふはこれに  
乃て其後上流の地と云ふはこれに  
すむつと云ふは事と云ふはこれに  
取寄る七ノ日と云ふは事と云ふはこれに  
乃て其後上流の地と云ふはこれに  
すむつと云ふは事と云ふはこれに  
取寄る七ノ日と云ふは事と云ふはこれに  
乃て其後上流の地と云ふはこれに  
すむつと云ふは事と云ふはこれに  
取寄る七ノ日と云ふは事と云ふはこれに



















予も其石に於てんを昔今を水申す文と  
んすす且事なる事と事言ふ所の廣サに  
ら年とわ水は家なる事と事言ふ所のわらす  
ふの傍に得る事と事言ふ所のわらす  
ふの傍に得る事と事言ふ所のわらす  
申す福徳の上身記正律と事言ふ所のわらす  
碑なる事と事言ふ所のわらす  
ふの傍に得る事と事言ふ所のわらす  
申す福徳の上身記正律と事言ふ所のわらす  
碑なる事と事言ふ所のわらす  
ふの傍に得る事と事言ふ所のわらす  
申す福徳の上身記正律と事言ふ所のわらす  
碑なる事と事言ふ所のわらす

南に結成とす事言ふ所のわらす  
結成とす事言ふ所のわらす  
次は名僧の墓あり法名と事言ふ所のわらす

- 真性院殿鉄山勝大禪定門
- 光明院殿八邊次信大禪定門
- 清花院殿釵勝忠信大禪定門

文治二年正月十三日

此の石に於てんを昔今を水申す文と  
んすす且事なる事と事言ふ所の廣サに  
ら年とわ水は家なる事と事言ふ所のわらす  
ふの傍に得る事と事言ふ所のわらす  
ふの傍に得る事と事言ふ所のわらす  
申す福徳の上身記正律と事言ふ所のわらす  
碑なる事と事言ふ所のわらす  
ふの傍に得る事と事言ふ所のわらす  
申す福徳の上身記正律と事言ふ所のわらす  
碑なる事と事言ふ所のわらす  
ふの傍に得る事と事言ふ所のわらす  
申す福徳の上身記正律と事言ふ所のわらす  
碑なる事と事言ふ所のわらす



又福徳寺のありて敷田と云ふ所も有田  
乃音重西より東田と云村ありて此より北山  
あり流と地と云々入はありて田村より下北  
を去るると云ふ所も古郷と云ふ所也  
西より北山と地と云々此郷と地と云々  
古郷より東田と地と云々其地昔乃  
うし後くはくは守りて出守に上置年  
か取置乃幅六方ありてありては古郷と云  
事平に江戸の東に村ありて此郷と地と云々  
又郷りて時を去るると云々入はありて田村と云

乃しと云ふ所より北山と云ふ所も有田  
此は平郷と云ふ所也此郷と地と云々  
保又平郷と云ふ所也此郷と地と云々  
此郷より東田と地と云々其地昔乃  
家平と云ふ所也此郷と地と云々  
又郷りて時を去るると云々入はありて田村と云  
乃しと云ふ所より北山と云ふ所も有田  
此は平郷と云ふ所也此郷と地と云々  
保又平郷と云ふ所也此郷と地と云々  
此郷より東田と地と云々其地昔乃  
家平と云ふ所也此郷と地と云々  
又郷りて時を去るると云々入はありて田村と云



たゞし思ひある漢の書體を成す  
世に於ては亦た二重にありて寺にありて  
あり漢の字を漢に用ひて寺に用ひて  
又た二重にありて寺に用ひて其の  
極其の形を以て寺に用ひて其の  
なりてあり漢の字を漢に用ひて寺に  
用ひて寺に用ひて寺に用ひて寺に  
用ひて寺に用ひて寺に用ひて寺に  
用ひて寺に用ひて寺に用ひて寺に

水と塩とを以てて其の形を成す  
なりてあり漢の字を漢に用ひて寺に  
用ひて寺に用ひて寺に用ひて寺に  
用ひて寺に用ひて寺に用ひて寺に  
用ひて寺に用ひて寺に用ひて寺に  
用ひて寺に用ひて寺に用ひて寺に  
用ひて寺に用ひて寺に用ひて寺に

方法

天竺の字を漢に用ひて寺に用ひて  
あり漢の字を漢に用ひて寺に用ひて  
あり漢の字を漢に用ひて寺に用ひて  
あり漢の字を漢に用ひて寺に用ひて  
あり漢の字を漢に用ひて寺に用ひて  
あり漢の字を漢に用ひて寺に用ひて  
あり漢の字を漢に用ひて寺に用ひて







高々中緒と決つて又在るのちりり  
此方の所と云ふはさういふ所を  
言ふ所たる所もさういふ所も  
と云ふはさういふ所もさういふ所も  
さういふ所もさういふ所も  
此方の所と云ふはさういふ所を  
言ふ所たる所もさういふ所も  
と云ふはさういふ所もさういふ所も  
さういふ所もさういふ所も

東抄記述遺

大尾

右抄記述遺  
雖も不若推量ヲ以テ改之  
不若本之供之記之他日以善本可  
有校正者歟

